

パネルディスカッション

司会…

名古屋城調査研究センター

学芸員

今和泉 大（今和泉）

パネリスト…広島大学名誉教授

三浦 正幸氏（三浦）

京都工芸繊維大学特定教授・美術工芸資料館館長

並木 誠士氏（並木）

名古屋城調査研究センター

学芸員

堀内 亮介（堀内）

今和泉 改めまして名古屋城調査研究センターの今和泉と申します。パネルディスカッションの司会を務めさせていただきます。よろしくお願いたします。

今回「十七世紀の名古屋城」というテーマで、講演・報告を用意させていただいたのですが、中々我々センターの学芸員の調査研究では全部を進展させるというのは難しいところがございます、そういった関係もあり、色々ご指導・ご鞭撻いただける先生方にご講演・ご報告をお願いしました。

まず、他の城郭の整備委員等を務めていらっしゃる三浦先生に講演・報告を振り返ってコメントをいただけたらと思います。どうぞよろしくお願いたします。

三浦 はい、ありがとうございます。私のほぼ妄想にすぎないようないい加減な話のあとで、非常に緻密な学術的な話をいただきまして、大

変に恐縮しておりますが、特にあとの報告で感動したところを申し上げたいと思います。

今和泉さんの報告は驚きました。徳川家康が（名古屋城の）造営中に二之丸にいて本丸にいなかったというのは（史料に）書いてあるのですけれども、今までの話ですと、平岩親吉の主計屋敷のどこかの一角に、下世話な言葉で言いますと同居していたというようなふうにあったのですが、今日の今和泉さんの話ですと、あれは明らかに（主計屋敷とは）違う建物のような気がしますね。それとも一つが唐門。二之丸御殿にあった孔雀門、これは四脚門というものでして、あれは元和の義直が二之丸に移徙してしまった（ときに）、造ったとするとどうしても理解できないところがあるのです。なぜかという、四脚門というのは左右大臣以上の屋敷でないと造ってはならないというふうになっていますから、（本来ならば）尾張徳川家の屋敷には造ることができない格式なんですね。で、（全国の城郭の中でも）御殿の中で四脚門があったということは、二条城の二の丸御殿にしかない。江戸城にもなかったんです。なぜ名古屋城に元和に（四脚門を）造れるか、明らかにおかしいと思っていたのけれども、今回今和泉さんのお話ですと、慶長十八年にできたのではないか。これですっきりする。慶長十八年でしたら徳川家康はもつと前に征夷大將軍、その当時は大御所ですが、要するに左右大臣並みになっていたから、唐門（四脚門）ができた（ということになり）、やっ

と長年の疑問が解消しました。びっくりするような話ですね。ということでもう一つ、延宝四年の時に門を閉めきる（という指摘があり）、たぶん不明門ではないかと今和泉さんはおっしゃっていましたけれども、そうだとすると天守の横にある不明門が、初めて「不明」（明

かず)の門になったのが延宝と、思っていたより遅いということでこれも驚きの話でした。

それから堀内さんの話はですね、驚くべきことで、二之丸の北御庭ですね、あれは一体いつできたのかということです。大体ひよっとすると慶長の城普請の時からできていたのではないかということも言われているのですが、慶長年間にあの庭があると非常におかしいんです。あつてはいけない庭なんです。理由は、二之丸というのは軍事施設であつて、庭は要らなかった。で、元和元年に大坂が落城した後になると必要になった。ということ。で今回明確に慶長年間には、要するに家康の頃には庭がなかったと、画期的な結論でいたく感銘いたしました。

最後の特別報告でございますけれども、私どもは絵図を見ますと基本的には二種類に分けて考えます。(一つは)ただの絵、描いたもの。それからもう一つは、絵ではなく図面とっているもの、当時の言葉で言う指図というもの。私が今まで北御庭の絵(中御座之間北御庭惣絵)を見ていた時に、あれは絵と全然思っていない、あれは指図と見えていたのです。要するに図面と見えていたのです。そうすると、絵画としてみると新たな見方が出てくる。で、今まで小さな図(画像)でしか見てなかったの、(大きな画像で見ると)聖堂のところの木目まで描いてある。あれほど精緻に描いてあるとは全然思っていなかったのです。あれは絵画的な価値もあるのだということが改めて別の観点で見ることができました。今日の皆様方の講演は私のいい加減な話と違っていて、極めて貴重な指摘でして、改めて皆様方にお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

今和泉 三浦先生、ありがとうございました。以上を踏まえまして各講演・報告の、架橋できるようなところの論点をあらかじめこちらで整理させていただいて、それについて議論を進めていきたいと思っています。

まずですね、御城全体の中の二の丸という曲輪全体のこと、そういった視点でのお話が三浦先生と、私今和泉の報告になるかと思っています。一方で、その中の特定の場所、御庭の実態とそれに関わる資料ということでお話いただけたのが、堀内ならびに並木先生のお話だったかなと思いますので、その二つにわけて論点を整理して議論させていただきたいと思います。

まず、御城全体の中の二の丸という視点で分けさせていただきますけれども、三浦先生には今回、色々縄張りの類型といいますが、そういったものを並べて、比較しながらお話をいただきました。その中で興味深かったのが徳川の譜代大名の御城の縄張りのお話でして、例えば公儀普請とかで築かれた御城の縄張りというのは、おそらく史料が少ないとは思いますが、最終決定権者といいますが、そういったのはやはり家康だと思ふのですけれども、そういったところがどのように決まっていくなかというところを、もし他の城郭含めて史料あるいは推測等ございましたらお話を伺いたいと思っております。

三浦 はい、ものすごく難しい質問です。それで雑に、天下人というのは信長と秀吉と徳川政権ですね。(その普請は)後世になってから天下普請と言われるようになりましたけれども、古くは公儀普請ですね。公儀というのは幕府のことです。それで、もう少し遡りまして、いわゆる天下人で家臣の城作りについて口出しをひどくしていたのが織田信長

であろうということは残されている手紙からわかります。それで信長が家臣であった細川藤孝、長岡幽斎ですね、彼が京都府の宮津城という御城を作るときに信長に許可を取っていたんですね。そしたら（これに関連する）信長の書状がありまして、これは実物が残っておりますけれども、内容的に言いますと、明智光秀の指図を受けて丈夫に造れと書いてあるわけなんです。造る場所が宮津というところに城を作るということを認めているわけなので、結局信長が家臣の城の許可を出す時にはどこに造るかという場所と、丈夫に造れというふうに書いてあって、しかも光秀の指図を受けろというものですから、かなり内容が突っ込んでいますけれども、具体的な縄張りまでは言っていないですね。ただ立派に造れと。秀吉に聞しましてはそういった書状は残っておりませんので、よくわかりません。誰に造らせたかというぐらいしかわかってませんから、（縄張りの指示等については）わからないんです。

次、家康の時代になってしまいますと、これもまたよくわからないことがありまして。家康の城の公儀普請については藤堂高虎がほとんどの指導をしていたということが大体わかっている。これは色んな文書でそういったことが出てきていますが、具体的にどういう指導をしていたかというのはわからないのですが、高虎の方の「高山公実録」というのがあります。そこに書いてあるのを見ると、後の軍学者が言うように、本丸は小さく造れと書いてありますので、高虎の言うように確かに本丸は小さく造ってあることぐらいはわかりますけども、あとの具体的なことはわかりません。要するに、出来上がった城を見てこれは高虎らしいなといっているだけなんです。

具体的な指示がわかっているのは唯一名古屋城だけでして、それも全

体の縄張りではなくて、中井正清が名古屋城天守の指図を二種類作ってそれを家康まで持っていたら―その二種類というのは小天守に対する入り方なのですが―その二種類を持っていたって、そうしたらただ単に天守の中に内住まい無用、要するに、内部を豪華な御殿には造らんでもよいと言っただけで。ただその時に天守の指図を二種類持っていたということになりますので図面はチェックしています。それから天守指図なので名古屋城全体の縄張指図はたぶん別の人が、要するに普請奉行ですね、それが家康の采を得ているだろうと思います。

ということ、どうも公儀普請の時に絵図まで確実に見たであろうと推定できるのが、たぶん名古屋城。それより前は、絵図面を本当に作ったかどうかというのはよくわからない。そうすると、（他の公儀普請では）全体の指示としては藤堂高虎にお前頑張つてやってこいぐらいだったかもしれないですね。ということ、今の（質問に対する）答えは、ほぼわかっていないけど、図面等でチェックしたりしたのはおそらく名古屋城が最初だろうなということぐらいでしょうかね。

今和泉 ありがとうございます。今お伺いした質問の続きになりますけれども、その中でお城を実際に検分しているというのは、ごく限られてくると思うんですね。今回先生のご講演の中でタイトルにもございます名古屋城の「類例なき特別な二の丸」が、他城郭に比べて大きき等もまた少し違うといったところは、やはりその検分を経て家康の意向みたいなのが反映されたものと捉えられるかなと思うのですけれども、その点いかがでしょうか。

三浦 それも記録のない時代ですのでよくわからないところがありますけれども、江戸城は家康がいた時に普請していますから、間違いなく自分がいるところですから実際検分しています。それから、隠居城として造った駿府城も自分がいたところですから、まともにやってる。で、名古屋城には普請中に時々来て、二之丸の主計屋敷、平岩親吉の屋敷、多分隣にあった屋敷でしょうけれども、そこに来て指図しているみたいですから、実地検分して造ったのは、江戸、駿府、名古屋しかないのではないかと思うわけです。

今和泉 ありがとうございます。そうしましたら次に私の報告を取り上げさせていただきます。私の報告の中で一つ引つかかっているのが、二之丸から重臣の成瀬・竹腰屋敷が出ていくという話なんです。全国的にも時代が下るにつれて郭外に重臣屋敷が移っていくというのはまに見られる現象なのかなとも思うのですけれども、例えば今回の名古屋城における重臣屋敷が移転していくところをどのよう捉えればいいのかというのを伺いたいと思います。

三浦 はい、わかりました。重臣の屋敷は元々二の丸に建っている例が多かったのですよね。本丸が城主、後に藩主と言われる人たちですけれども、城主、大名の屋敷。で、二の丸が重臣の屋敷っていうのは結構多かったのですが、だんだん重臣屋敷が外へ外へというふうに移転されています。色んな例がありますけれども、例えば江戸城の中で、本丸はもちろん、二の丸・三の丸も將軍家なのですが、いわゆる内堀の中に、徳川御三家だとか、それから家光の弟の忠長の屋敷とか、そういったものが

内堀の中に建っていたのですが、明暦の大火の後は、江戸城の城外に移転しちゃうんですね。そういったところを見ると、元々將軍家ですから（重臣屋敷という位置づけでは）徳川御三家が中心でしょうけれども、そういった重臣の屋敷をこの郭外に出してしまうというのは、江戸城では明暦の大火、一六五七年の大火事によるその後の整理が一つの原因になっていますね。

もう一つは、他の資料で考えてみますと、慶長年間に造った城は、本丸の御殿が結構小さくて、要するに（その後の時代に比べ）典礼の仕方が違うんですね。それが、元和・寛永期で参勤交代の制が確立しまして、寛永期以降になりますと江戸城御殿に非常に大きなものが必要になってくるわけですよ。そこで行われる対面の儀式を各大名たちが自分の城で行おうとすると、それまでの御殿では全然役に立たなくなっちゃう。そこで、本丸御殿に住んでいた殿様が二の丸へ引越す。で、二の丸に引越されてしまうと、今度は重臣たちは追い出されて三の丸に入る。要するに玉突き状にどんどん外へ追い出されていってしまうというのが元和・寛永期から起こっていきます。その一つの原因は、この対面の儀式が非常に厳格化してしまって、大規模な御殿が必要になってしまった、それが一つの理由かもしれません。だから元和・寛永ぐらいの時に、それから江戸城の場合には明暦ですけれども、大規模なそういった変遷があつて、重臣が外へ行く。だから、名古屋城の場合もそういった全体的な傾向のもとに、成瀬・竹腰家が外に追い出されたというふう

に考えられますね。

今和泉 ありがとうございます。私の報告の中では、（二之丸御殿の）

居住者が増えたという文脈で、成瀬・竹腰家は郭外に移ったのではないかとというような趣旨で報告させていただいたのですけれども、江戸も含めて、そういう全国的な動向を踏まえていないところがあつたので、今のご意見・ご指摘を受け、今後また再検討できればと思います。

次に、御庭の実態と資料に関して堀内さんと並木先生に話をお伺いしたいのですけれども、まず堀内さんのご報告で、かなり二之丸御庭の成り立ち、始まりのところを比較的信頼できる史料に基づいて明確にしてもらったかなと思っております。同時に、推測等に依拠してきた御庭の成り立ちに関する定説、例えば上田宗箇が関わったとかですね、そういった研究史を塗り替えることができたのではないかと思っております。

堀内さんのご報告で、義直が早期から御庭の造営に係わっていたというご指摘があつたのですけれども、かなりこだわりの持ち取り組んでいたのではないかなという感想を抱きました。その上で、色々建物の変遷等も整理していただいたんですけれども、東照大権現を寛永十年段階で勧請したということを指摘していただいております。実際にそれを祀った御宮ですとか杜的なものを御庭に築いていたというのが、堀内さんの新見解の一つかなと思うんですけれども、その根拠として挙げたのが「金城温古録」に引用された一説でした。この点かなり重要な点だと思つたので、詳しくお伺いできたらなと思つたのですけれども。

堀内 はい、わかりました。今回、二之丸御庭にこの東照宮が勧請されたということの根拠としてあげたのが「金城温古録」という史料なんですけれども、そもそも「金城温古録」とは何かということを少しだけ説明しますと、この「金城温古録」というのは、十九世紀の中頃に奥村

得義という尾張藩士がいるんですけれども、その人が藩の命令を受けて名古屋城の歴史をまとめると言われて編纂した本なんです。で、奥村得義はそれを人生をかけて調査して、幕末の一八六〇年代に尾張藩に提出したというものです。奥村は幕末まで生きた人なので、それ以前の歴史は、（奥村でも）やはり色んな資料を調べないといけないということとで過去の史料を調べて引用しています。「金城温古録」というのは名古屋城の本丸だとか、二之丸だとか、三之丸だとか、各場所によって事項、テーマをつけて展開していくという資料です。で、今回引用したのは、その中の三之丸、二之丸ではなくて三之丸に東照宮について解説したパートがあります。「金城温古録」は六十四冊あつて、今、画面で映しているのはそのうちの六十冊目の「東照宮」というところになるので、すけれども（図1）、この中に、三之丸にあつた東照宮、これは元和五年、一六一九年に、義直が今の金シャチ横丁（義直ゾーン）の辺りに東照宮を造つたのですけれども、その東照宮についての解説が書いてありまして、東照宮の全体の解説をつらつらと書いてあるわけなんです、その中に、この「古田家の記録抜書」というのが引用してあるわけなんです。で、奥村得義の時代だと、名古屋の東照宮と言えばこの三之丸の東照宮を指したわけで、奥村はこの（「古田家の記録」の）記述を見て、これは三之丸の東照宮に關係する記述なのだなと思つて、この「金城温古録」には三之丸の東照宮の話として引用したわけなんです。本報告でもお伝えしたように、寛永十年の記事で、三之丸東照宮に東照大権現を勧請するというのは時期が全然合わない。もう十年以上前に東照宮は成立しているわけなので、時期が合わない。ですが、奥村が参照した記録そのものに関しては、事実だと思われるわけですね。つまりこの寛永

十年の「尾州東照宮御神体」の勧請つていうのは、「金城温古録」では三之丸のこととされているのですけど、実際は違っていてこれは二之丸の東照宮、権現山に勧請された時の権現山の東照宮の記述だろうということとで推察したわけです。他の記録も見ていきますと、これも「源敬様御代御記録」という、義直の伝記のようなものがあるのですが、そこに寛永十年、「古田家の記録抜書」で記述された「尾州東照宮御神体」勧請と）ちょうど同じ年に鳥羽の城主から石材をもらい受けたという記述が出てくるわけです。こういったところを二つ考えると、やはり（寛永十一年に）家光がやってくるのに合わせて二之丸を改修した。家光が来て一番喜ぶのはやはり家康、自分のお爺さん（に所縁のあるモノ・コト）であり、（家光は）家康のことを尊敬していますので、その人を祀った東照宮を二之丸に配置して勧請してきてそれに参拝するというのは、やはり家光に対する、思いやりというよりは、とても家康を敬って行った行為なのではないかということと考えたわけです。つまり、この「金城温古録」の記述というのは、二之丸の東照宮のことだというふうに考えております。実際にどうなのかというのは、今後資料などを見つけていきたいと思うのですけども、少なくとも可能性としては提示できたのではないかなというふうに思っております。

今和泉 ありがとうございます。その件に関連して、今回並木先生に「中御座之間北御庭惣絵」に関する絵画的な位置付け、分析をお願いしてご報告していただきました。先生のご報告で、この絵は「庭園絵図」という位置付けができるのではないかと、かなり意義あるご指摘をいただいたわけですが、でも、「庭園絵図」という捉え方は、例えば絵画

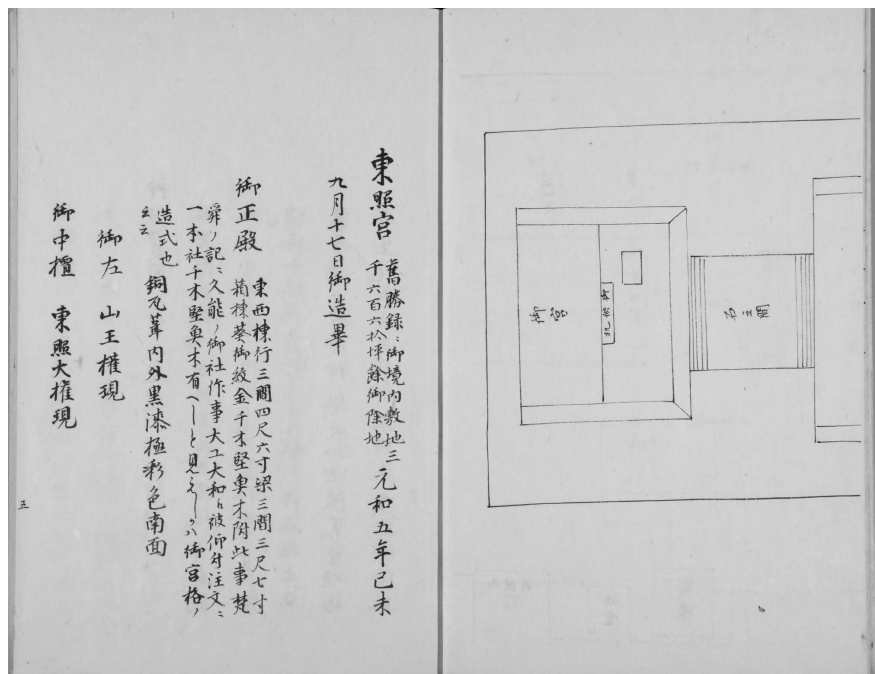


図1 「金城温古録」第六十（三之丸東照宮）
（名古屋市蓬左文庫蔵、部分）

に実測性を備えさせた絵図というよりも、実測図面に非常に写實的な、精確な絵画表現を載せた絵図というような捉え方として理解してもよろしいものなのかということをお伺いしたいのですけれども。

並木 はい。今まとめていただいたことで大体いいと思うのですけれども、同時代にその庭園というのができてきた時に、いわゆる図面というもので見るだけではなくて、庭をよりリアルに体験するために、回遊して歩き回って見た時のその視覚をそこに取り込んでいくというような、そういう描き方が日本で出てきたというのが、このように認められるのではないかとということで、図面にはない実体感みたいなものがこの絵の中にあるということを、そういうふうに想定をしております。

今和泉 ありがとうございます。それで、堀内さんのご報告と繋がる点として、権現山の描写の問題があります。堀内さんのご報告では、権現山と称される築山のところに寛永十年に杜的なものが築かれたのではないかというご指摘だったと思います。また「(惣絵)」の制作年代は、寛永年間、御庭が作庭され整備されていく時期に位置づけても矛盾がないというのが先生の指摘だったと思います。一方で景観年代としては、やはりある時点の御庭の姿を描いてるのかなと思うのですけれども、寛永十年に杜的なものができたのだとしたら、景観年代としてはそれがない(それ以前の)時期を描いたものだと思ってしまうのですが、この点いかがでしょうか。

並木 そうですね。景観年代という言葉は美術史でもだいぶ使うようになってきているわけですが、要するに、あるものはもちろん描けるし、あったものも描けるけど、ないものは描けないというようなことがあって、このような、今日の堀内さんのお話で実際にその聖堂と文庫があって権現がない時期というのがかなり狭められたと思うんです。

ね。だからそういう意味では、この絵のその景観を考える時に、今日の発表する意義だったと思うのですけれども、おそらく次に必要な作業としては、その間の時期に、つまり権現山(東照宮)ができるまでの時期にこの絵を描く必然性がどうしてあったのか、どういうきっかけがあったのかということが、例えば今日のその色々な資料を探していらした中に出てくるかどうかという問題だと思います。で、これ4m、3mぐらいの非常に大きな絵ですし、当然(尾張徳川家)内部の者が描いた可能性が非常に高いわけです。全く外の人が描いたと思えないわけです。しかもおそらく一人ではないだろうということを考えると、やはり何かこう契機がなければこれだけのものではないし、おそらく数ヵ月かかるようなものだと思うので。そうすると、やはり(御庭が)この状態の時に何かこう大きな絵を描かなくちゃいけない必然性があつたはずなんですよね。それが様式論ではわからないけれども、もし記録の方で何かそういうのが浮かび上がってくると大変面白いことになるかと思います。もちろん、これがそこで描かれたものを後から写したものという可能性が全くないわけではないと思うのですけれども、かなり様式的に十七世紀の前半ぐらいでいいということを踏まえた上で考えると、その間の時期に何があつたのかということを、これからぜひ堀内さんに突きとめていただきたいというふうに思っています。

堀内 ありがとうございます。この絵図が描かれた記録や、この絵図がどうして描かれたか理由を示すような文献資料というのは今のところやはり見つからないのが現状なんです。ただ、今回「(中御座之間北御庭惣絵)」に見られるような(権現山に社がないこの時期というの

は、義直が聖堂を作って権現山を勧請する間の時期で、もしくは、光友の時代に、権現山から東照宮が移転している（時期で）、少し空白期間があるのかなと思うのですが、そういった時代なのかなというのがあって。やはり二之丸御庭というのは、殿様の意向、義直の意向とか光友の意向とかが強く働いて整備されていると思うので、そういった人らの意図が分かるような記録とかを今後は探していきたいなと思っていて、まして、彼ら殿様の意図というのがわかれば、この絵図が作られた理由、光友の場合は義直の時代、自分の先代のお父さんの時代の庭というのを残しておきたかったとか、そういった理由は想定できるかなと思ったりはするのですが、そういった記録を今後見つけていきたいかなというふうに思っているところです。ありがとうございました。

今和泉 はい、ありがとうございました。次に各講演・報告に対して、質疑応答をそれぞれ自由に行いたいと思います。報告順にいきたいと思うのですが、三浦先生のご講演に対する質疑等ございましたら、よろしくお願いいたします。

堀内 よろしいでしょうか。

今和泉 では堀内さん、よろしくお願いいたします。

堀内 私の方から先生にお伺いしたいのが、三浦先生の今回のご講演の中で、二之丸というのが軍事拠点として家康によって作られた。これとても画期的な視点だと私は思ったのですが、それでも、築城期の、慶長

十五年ですね、家康が縄張りを命じて御城を作らせた慶長十五年の段階で、家康自体がどこまで豊臣家を滅ぼそうとしていたのか、そういったことを三浦先生の今日のお話に縄張りのお話とかがあったと思うのですが、そういったところから、家康の意図というのが、本当に豊臣家を滅ぼすのか滅ぼさないのか、そういった意図というのが、どのくらい強かったのかっていうのを伺いたいなと思うのですが、よろしいでしょうか。

三浦 その時の家康の心境はわかりません、本人に聞かないと。ただ名古屋築城の時に、大坂より西側は全て豊臣側の大名の巢窟でして、彼らが秀頼を担ぎ出せば間違いない幕府は滅びますね。従って、家康は生きているうちに豊臣を滅ぼしておかないと徳川はなくなると、それは切実に思っていたはずなので、従って、名古屋築城というのは豊臣を滅ぼすための最終手段。だから名古屋が築城して完成したら直ちに豊臣を滅ぼしてしまおうと。現に名古屋築城が終わった瞬間から、豊臣に対する最終締め付け方、方広寺鐘銘事件についての難癖（が起こった）ですよね。で、とにかく豊臣側が立ち上がるのを促して、最終的に目的を果たしていますから、慶長十五年において名古屋築城の目的は、それまでの丹波篠山、丹波亀山などを築城していた頃は、これは大坂城を包囲してどちらかというを抑え込もうとしていたのでしょうか、名古屋城の場合はどう考えても好戦的な城に造ってありますから。もう開戦を間近として、とにかく滅ぼすための最強の城を作ったというふうに考えると、名古屋城の二之丸というのが、それまで徳川の譜代大名が造った城、それから公儀普請で造った城と全く違っている、その点が二之丸

の特質なのです。今まで以上に二之丸がやたらと嚴重にある。それから、本丸からかなり独立しているというか、さらにやたらと広い。その辺のところを考えてみますと、これはやはり軍事拠点として二之丸を考えたのでしょうか、と思えないというのが私の考えでありますけれども。

ただ、これを実証することは結構難しい。ただ単に、関ヶ原から慶長十五年までの十年間における、西日本の外様大名の配列から見ていて非常に危機を感じていた。なおかつ名古屋城に動員した外様大名二十家は、家康にとつて仮想敵国ですね。最も豊臣秀頼を担いで反幕府の行動を起こしそうな者を全部選んで、それで造らせたということは、名古屋城のこの戦略的な価値、意義を知らしめて、逆らったただではおかんぞという、そういう意気込みがあった。とても大坂城よりも名古屋城のはるかに強力であるということを認識させて、それで穏便のうちに、要するに西国大名らが立ち上がる前に豊臣家に滅ぼしてしまおうと。そういう意味で、戦略的な意味が名古屋城には非常にあったと思うのです。そういうことで、名古屋城が非常に特殊な二之丸を持っているというのは、かなり強力に豊臣を滅ぼすぞという決意の表れじゃないかと思うのです。

堀内 ありがとうございます。やはり公儀普請で豊臣家の包囲網という視点が強く、私もどこまで本当なのかと思うところではあったのですが、今日の三浦先生のお話を聞くと、やはり名古屋城の、この豊臣家に対する軍事拠点という意味合いがかなり強いかなと思うところではあるので、今後私の方でも考えていきたいと思っています。ありがとうございます。

今和泉 ありがとうございます。次に、私今和泉の報告に対する質疑等があればよろしくお願いいたします。

三浦 大変良くできた報告で、質問は全くありません。

今和泉 ありがとうございます（笑）。過分なお言葉で大変恐縮です。先ほどいただいた、三之丸移転の話などもっと他の城郭等々とリンクして検討する必要があるのかなというところはございますので、それを踏まえまして、今後も調査研究等続けさせていただけたらなと思います。次に、堀内報告に移りますけれども、質疑等いかがでしょうか。



図2 「中御座之間北御庭惣絵」
(名古屋市蓬左文庫蔵、権現山部分)

並木 はい、いいですか。先ほどの話と関わるわけですけども、このようなもの（「中御座之間北御庭惣絵」）を見た時に、やはりその権現が置かれるべきところですね、あそこが禿げているというか、何も無い（図2）。こういう状態の時がどういう状態だったかということが、記録を克明に読まれていった時に、何か出てきませんかね。

堀内 そうですね、結局権現山に関する情報というのは、今日紹介した記録が本当にメインで、他の記録はあまりない。先ほど「金城温古録」もそこまで詳しくは書いてない。書いてあるのは、山の上に元々は熊野社と愛宕社があつて、それが、時代が移りかわり、光友の頃なのですけど、後に稲荷と秋葉に変わったつていう情報だけで、その他の情報、権現山の上に社がない空白期間の情報というのは、特にここからは見られないかなと思いますね。なので、やはり林羅山がやってきた時は権現山には触れられなかった。つまり権限山はなかったのではないかという、ちよつとした推測みたいな形になってしまうのは確かですね。

今後、権現山に関する資料、山の上に何もなかった状態から新たな神社が勧請されたとか、そういった情報が見つかれば、また変わってくるかなと思いますので、これも今後の調査の状況によるかなというふうには思っております。

並木 この状態が描かれるというのは結構特殊な状況だと思うので、ぜひそこを説明していただければと思います。

堀内 ありがとうございます。



図3 「中御座之間北御庭惣絵」
（名古屋市蓬左文庫蔵、池部分）

今和泉 ありがとうございます。続きまして、最後、並木先生のご報告に対して質疑等あればよろしくお願いします。

堀内 では私の方から。この絵（「中御座之間北御庭」）で私が一番気になっているのは、この池ですね（図3）。池に水が張ってあるように描いていると思うのです。で、橋の周りとかは水が波打っているような描写とかもあつて、今、二之丸御庭に残っている池に（江戸時代には）水があつたかどうか、どっちの状態だったのかという議論が名古屋城内であり、張つてある状態なのか、今みたいに何もなかった状態なのかというのを、色々検討している段階です。この絵図を見る限りでは水が張っ

てあるように見えるのですけど、やはりこういった絵図を描く場合は、存在しない水を、本当はないのだけど想像して描いたものなのか、それともやはり実際の御庭を見て水が張ってあるからそのままそれを写したのか、そういった見解など、先生の方で何かわかればお伺いしたいなと思います。

並木 はい。一般的にはいろんなケースがあると思うのですが、こういうかなり正確に描こうとしている絵だと、実際にあった情景を見て描いていると思います。確かにさっきおっしゃったように、水際のところは、水は全体に群青系の青い顔料で描くのですけれども、ちょうど今、上の方にも見えますけれども（図3）、波が押し寄せてくるようなところが白い胡粉で描いてあったりするので、そういう意味では明らかにこれは水がある状態であることは間違いないし、全体のあり方から考えると、少なくとも絵師が見た時には、水がちゃんと張ってあったというふうに考えるべきだろうと思います。

堀内 ありがとうございます。この辺りの絵図の表現などを、水があったことの根拠にできればというふうに思っていましたので、今のお話はとてもありがたいご指摘だったと思います。ありがとうございます。

今和泉 はい、ありがとうございます。まだまだ議論は尽きず、先生お二人にももっとご教示・ご指摘いただきたいこともあるのですけれども、お時間もきてしまいましたので、最後に、ご講演・ご報告いただいた皆様からひと言ずつコメントをいただきたいと思います。三浦先生か

らよろしく願います。

三浦 はい、ありがとうございます。私を除いたお三方の、これは極めて学術的でありまして、今後の名古屋城の研究に大いなる発展があるのではないかと思います。一層期待をしたいと思います。よろしく願います。

堀内 今回、色々と二之丸御庭に関する資料を見てきて、やはり築城期の二之丸御庭、義直の時代の二之丸御庭は、今まではほとんど推測に基づいたようなことしかわかってなかったのですけれども、今回示した「旧事帳」で、義直が（名古屋城に）入って二年後の元和四年の二之丸を改修しているという資料があったりしました。また、権現山の話は少し推測も入っていたかとは思いますが、（二之丸御庭には）東照宮があったという、これまで指摘されなかった説を今回示せたのが、一番意義があったかなというふうに思っています。

名古屋城の庭園は国の名勝にも指定されていて、今の名古屋城の中でも縄張りや石垣と一緒に、江戸時代当時のすがたを知ることができる貴重な場所だと思うので、そういった御庭がどういう経緯でできたのかというのを、今回紹介できたのは意義のあることだったのではないかと思います。ありがとうございます。

並木 これはまたお二人にこれから頑張ってもらうことになるかもしれませんが、二之丸庭園はこの後（＝尾張徳川家十代斉朝期）東南の方に拡張しますよね、だいぶね。そうすると、その頃の絵図を見ると、今

（映している「中御座之間北御庭物絵」の何もない左側の方もかなり庭が整備されてきていると思うので、少し「庭園絵図」という観点から、二之丸の庭園の進展・発展についてまた色々調べていただけたらと思うので、期待しております。よろしくお願いいたします。

令和泉　ありがとうございます。ということ、もうお時間もきてしまいましたので、パネルディスカッションを終えさせていただきたいと思うのですけれども、最後に私の方からひと言コメントさせていただきま（テーマが）「十七世紀の名古屋城」ということで、家康の時代の文献資料等を色々調査してきたのですけれども、やはり通常想定されてきた以上に、家康の二之丸としてのスタートの性格が強かったのではないかなというのが、調査の中で実感してきたところでして、その意味で言うと、先ほどの三浦先生のご講演と繋がるところがあるのかなと思うのですけれども、この点をまた改めて強調しておきたいと思います。

また、資料的にどうアプローチしていくかということですが、十七世紀というのは、先ほど三浦先生のお話でもあったように、資料というのが、文献資料に関わらず、古い時代にいくにつれ現存するものが少ないという課題・制約があります。そうした中で、今回堀内さんのご報告ですとか並木先生のご報告で、これまで知られてきた資料を見直す、捉え直すという、そういう試みで、新たな事実ですとか新たな位置付けというものを見出しているというのが各報告の成果で出まして、そして今後の研究の可能性を示していただいたのではないかなというのが感想でございます。これらを踏まえまして、これまでもよく知られてきた資料でも再検証・再検討の余地があるのではないかとということで、今後

調査研究を進めていければと思いました。

色々いただいた課題、問題等あると思いますが、そうしたものを踏まえて名古屋城調査研究センターでは今後とも調査研究、そして名古屋城の魅力を発信していけるように努めたいと思います。先生お二方、また会場の皆様におかれましても、名古屋城調査研究センターの調査研究に関して、今後ともご指導・ご鞭撻を賜れますと幸いです。よろしく願い申し上げます。

《終》